

「モノダ」文の意味と構文構造*

- 「形容詞 + モノダ」文を中心に -

黄允實**
hwangsys@gmail.com

〈目次〉

- | | |
|----------------------|-------------------------|
| 1. はじめに | 4. 「形容詞 + モノダ」の構文分析 |
| 2. 先行研究 | 4.1 「形容詞 + モノダ」文の主語の示し方 |
| 2.1 寺村(1981) | 4.2 「形容詞 + モノダ」文のタイプ |
| 2.2 日本語記述文法研究会(2003) | 5. おわりに |
| 3. 分析対象と用例数 | |

主題語: モノ(mono)、構文構造(construction form)、モーダルな意味(modal meaning)、主語標識(subject marker)、「形容詞 + モノダ」文(“Adjective+monoda”sentence)

1. はじめに

「もの」という名詞はいわゆる形式名詞で、実質的な意味が希薄な名詞と言われ、その意味の抽象性によって、モーダルな意味を表す形式への移行がみられる。まず、例(1)をみると、主語「いまもっている化石」は「は」で示されており、ここでの「もの」は主語名詞の「化石」のかわりに用いられたもので、典型的な述語名詞としてふるまっている。一方、例(2)では、主語は文中に現れておらず、前後文脈の何らかの事柄や状況を指して述べている。ここでの「もの」は述語名詞性を失い、典型的なモーダルな意味を表す形式になっている。

- (1) 千九百九十年のパリのアメリカ人である私にとっては、いまもっている化石は想像以上に古いものである。(生きた化石と大量絶滅)
- (2) 考えても仕方がないことに囚われているのは同じでも、猫の行動の理由を推測しているほうが、ずっといい。少なくとも、自分の記憶を疑いながら、鬱々と考え込むより、ずっと

* 本稿は2018年度東京外国語大学大学院に提出した博士学位論文の一部を加筆・修正したものである。

** 韓国外国語大学校 日本語通訳学科 非常勤講師

健全だろう。猫のやることの理由を考えるのは、ただの猫馬鹿。それに御伽噺のような管狐が加わったとしても、どう考えても暇人の悩み。お気楽なものだ。「...お前があんなに騒ぐのは、初めて見たよ」
(花を愛でる人)

このように、「もの」には述語名詞として機能する場合とモーダルな意味を表す場合があり、これについてはこれまで多くの研究において指摘されてきた。だが、このようなモーダルな意味を表す形式への移行には意味の変化だけでなく、さまざまな構文的な要素が関係していて、それによって文の形も異なってくるように思われる。

本稿では、従来の研究とは違って、述語名詞としての「もの」からモーダルな意味を表す「ものだ」への移行を何らかの構文的な形として示すことが可能ではないかと思ひ、まず形容詞の修飾をうけている「形容詞+モノダ」文を対象に、「モノダ」文における特性の持ち主の示し方に注目した。述語名詞としての「もの」とモーダルな意味の「ものだ」との連続性の観点から、「ものだ」の意味とさまざまな構文的な形とがかかかわっていることを示したいと思う。

2. 先行研究

「モノダ」文についてはこれまで多くの研究がなされている。特に「ものだ」の意味用法に関する研究が中心となっているが、ここでは「もの」の形式化に関する代表的な研究である寺村(1981)、日本語記述文法研究会編(2003)を概観することにする。

2.1 寺村(1981)

寺村(1981)は名詞の形式化について、寺村(1981 : 744)で「名詞がその実質的意義によって文の実質的内容を埋める文末の機能から、実質的意義を担う部分をつなぎ合わせたり文末の陳述を完成させたりする機能に転ずるに従って、それらの名詞の実質的意義は希薄になり、時には前身を云々するのが無理なほどかけはなれたものとなる」と述べたうえで、「名

1) 本稿の目的は「モノダ」の意味用法の分類ではない。述語名詞としての「もの」からモーダルな意味(事柄の内容に対する認識態度や詠嘆など)を表す「ものだ」への移行と構文構造の変化との関係性を構文的な形として示すことを目的とする。

詞の文末の形であるモノダ、コトダと「助動詞化」したモノダ、コトダとはっきり一線を画することが難しい場合がある(p.755)」と指摘している(pp.755-756、例26~28、例文番号は本稿の通し番号)。

- (3) 「私は、せんそうがとでもざんこなものだと知りました。一つのせんそうがあるため国はメチャメチャになり、ほのおの海になってしまうのです。だれがせんそうなんて考えたのでしょうか」
- (4) 「もうちょっと云わせて」とおそのは頭をぐらぐらさせながら続けた。「一女というものはね、おしのちゃん、自分のためにはなにもかも捨てて、夢中になって可愛がってくれる人が欲しいものよ。あたしのためならむさし屋の店も、財産もくそもないというほどうちこんでくれたら、あたしだってもう少しあの人に愛情を持たせたいと思う」
- (5) 「……北海道のよさは、晩秋と冬ですね。雪の深いのも見事ですが、今ごろ、満山の葉が落ちて蕭条とした風景になっているのもいいものですよ」

(3)のモノダのモノは、「ざんこなものだ」を「(その)ものが残酷だ」と置き換えられないこともないから、名詞としての使い方と同じであると言えるが、そのような「修飾語対被修飾語としてのモノ」という関係を(4)にも認めることはもはや無理であり、(5)のように、「いいものだ」という叙述の主題は、一つの風景である、といった場合になると、モノはダといっそう強く一体化して、先行する句全体に対する話し手の主観を表わすものとなっている(p.756)と説明している。

つまり、「「…モノダ」は、本来はある対象を大きくモノに属するものと類別し、修飾部「……」でそれを特定するという形であるが、その修飾部が単なる特定・限定という範囲を越えて、「一般に(主題となっているあの特定の対象が)こういう性格、本性をもっている」という主張の、その性格、本性を表わすように使われることが多い。そのように「Xハ…モノダ」という単なる類別と特定を表わすための容れものがXについての話し手の本性規定を表わすためのものとして利用されるとき、モノダは「Xガ……デアルコト」を包む陳述の助動詞とみなすべきものとなる。そしてその「本性規定」は、客観的な事実として述べる体裁をとりながら、自分がこれまで気付かなかつたある対象の本性、話し相手ないし世間一般が気が付かずにいるある本性を相手に訴えたい、気付かせたい、共感を求めたい、といった心の動きに出ている(p.756)」と述べている。

2.2 日本語記述文法研究会(2003)

日本語記述文法研究会編(2003)では、「もの」は名詞として用いられているのか、助動詞「ものだ」として用いられているのかという区別が困難な場合がある」とし、次の例を挙げ、説明をしている。「ものだ」の「もの」をほかの実質的な名詞で置き換えても意味が変わらず「ものだ」に「もの+だ」という意味以外の特別の意味合いが感じられない場合は、名詞の「もの」である(p.192)と述べている。

- ・ これは、手紙の封を切るものだ。
- ・ これは、手紙の封を切る道具だ。

これに対し、「ものだ」の「もの」をほかの実質的な名詞で置き換えることはできるが、「ものだ」に「もの+だ」という意味以外の特別の意味合い(本質や傾向を表すなど)が感じられる場合は、中間的であるが、助動詞の「ものだ」である(pp.192-193)と述べている。

- ・ 人間というのは、孤独なものだ。
- ・ 人間というのは、孤独な生き物だ。

なお、「ものだ」の「もの」をほかの実質的な名詞で置き換えることができない場合(「うれしいときにはうれしそうな顔をするものだよ」p.193)は、助動詞の「ものだ」であると指摘している。

本稿では、これまでの研究を踏まえ、「形容詞+モノダ」文において特性の持ち主がどう提示されるかに着目し、述語名詞としての「もの」からモーダルな意味を表す形式までの分布について述べる。

3. 分析対象と用例数

本稿で扱う「形容詞+モノダ」文の用例は、主として国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)から、すべてのジャンルを検索対象とし、検索アプリケーション

「中納言」を用いて採取した。「形容詞」については短単位の品詞分類から「形容詞」(「形容詞—一般」「形容詞—非自立可能」)、「形状詞—一般」、「名詞—普通名詞—形状詞可能」、「名詞—普通名詞—サ変形状詞可能」の四つを指定し²⁾、文末の形式としては、「だ」「です」「である」「でございます」を指定して検索した。たとえば、文末形式が「だ」の場合は「形容詞」が1191例、「形状詞—一般」が466例、「名詞—普通名詞—形状詞可能」が261例、「名詞—普通名詞—サ変形状詞可能」が28例の計1,946例が得られた。なお、文末形式が「です」「である」「でございます」の用例もこのような方法で採集し、それぞれ2,226例、1,065例、58例得られた。以上の検索条件によって採集した「形容詞+モノダ」文の総用例数を<表1>に示した。

<表1> 「形容詞+モノダ」文の総用例数

「形容詞+モノダ」文	用例数	割合(%)
「形容詞+ものだ」文	1,946	36.8
「形容詞+ものです」文	2,226	42.0
「形容詞+ものである」文	1,065	20.1
「形容詞+ものでございます」文	58	1.1
合計	5,295	100.0

4. 「形容詞+モノダ」の構文分析

4.1 「形容詞+モノダ」文の主語の示し方

まず、「形容詞+モノダ」文に主語が文中に現れているか否かを調査し、その用例数を示すと次のようになる³⁾。

- 2) 本稿の対象となる品詞の形容詞(形容詞と形容動詞)、名詞について、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)の短単位の品詞分類を参照した。形容詞について簡単にみると、「形容詞」(「形容詞—一般」(「高い」「大きい」など)「形容詞—非自立可能」(「いい」「ない」など)、「形状詞—一般」(「大切な」「好きな」など)、「名詞—普通名詞—形状詞可能」(「不思議な」「楽な」など)、「名詞—普通名詞—サ変形状詞可能」(「贅沢な」「失礼な」など)の四つを検索条件として指定した。
- 3) 採取した用例5,295例には、重複している例、「ものだ」が主節ではなく、従属節に現れている例(「安いもんだと数千円で購入出来ます」)、動詞の活用形として「ない」が含まれている例(「元来格式ばらないものですから、あまり書式にこだわる必要はない」)、「~ふうなものだ」の例(「もしそういうようなことで生態系そのものにも大きな影響を与えているというふうなものであるならば、(後略)」)などの50例が含まれており、分析の対象から除外した。

<表2> 「形容詞+モノダ」文の主語の現れ方と用例数

「形容詞+モノダ」文	用例数	割合(%)
主語が文中に現れる場合 ⁴⁾	3,850	73.4
主語が文中に現れない場合	1,395	26.6
合計	5,245	100.0

<表2>の総用例数をみると、“主語が文中に現れる場合”が73.4%を占めているのに対して、“主語が文中に現れない場合”は26.6%である。<表2>の上段の“主語が文中に現れる場合”を対象に主語をどう示すかをさらに調査し、その結果を<表3>に示した(「その他」の示し方を除いて、用例数と割合の高い順に示した)。

<表3> 「形容詞+モノダ」文の主語が文中に現れる場合の示し方

「形容詞+モノダ」文の主語の示し方	用例数	割合(%)
は	2,548	66.2
も	330	8.6
というのは類(「ということは」「というものは」など含む)	301	7.8
が(「ということが」などを含む)	252	6.5
とは	105	2.7
無表示 ⁵⁾ (条件節/ヘガ節など)	88	2.3
って(て)	87	2.3
なんて(「なんか」4例/「なんぞ」1例含む)	33	0.9
(無助詞)	30	0.8
というのも類(「ということも」「というものも」など含む)	17	0.4
だって	11	0.3
その他(「といえば」など)	48	1.2
合計	3,850	100.0

<表3>の主語が文中に現れる場合の示し方をみると、その具体的なタイプはさまざまで

- 4) 当該の文において主語が現れていなくても前後の文脈に主語相応のものが現れていて特定できる例はここに含まれている。次の例では「ビン詰めコレラ菌」が主語に相応するものと判断される。
・「いわゆる、ビン詰めコレラ菌です」青白い男の顔に、かすかな満足の色がちらりと浮かんだ。「あなたの所有物の中で、手を触れると一番恐ろしいものですね」と、(後略)(タイムマシン)
- 5) 表中の「無表示」というのは「と」「たら」などによる節(従属節)をもって特性の持ち主を提示している例であるが、詳しくは本文で後述する。

ある。まず、主語を「は」で提示する場合は約66.2%を占めており⁶⁾、「形容詞+モノダ」文は基本的に「主題・解説」という提題構文の形式を取って、主語の恒常的な特性を述べると言えよう。その次は、「も」(8.6%)、「というのは」類(7.8%)、「とは」(2.7%)である。その他、「って」(2.3%)、「なんて」(0.9%)、無助詞(0.8%)、そして無表示形式(2.3%)もみられる。また、「が」で示される場合が6.5%あるが、この場合のほとんどは「ものだ」が引用節のような従属節に含まれる場合である(「彼の全著作の中でこの本が最もすばらしいものだと称えた。(神は老獺にして...)」)。

上の結果をさらに文のタイプに示しなおし、<表2>の“主語が文中に現れない場合”も含めて全体の割合をみると、次のようになる。

<表4> 「形容詞+モノダ」文のタイプ

「形容詞+モノダ」文のタイプ		用例数	割合(%)
主語が文中 に現れる 場合	「Nハ Adjモノダ」	2,548	48.6
	「Nガ Adjモノダ」(「というのが」類も含む)	252	4.8
	「N節トイウノハ Adjモノダ」	301	5.7
	「Nトハ Adjモノダ」 ⁷⁾	100	2.0
	「節トハ Adjモノダ」	5	
	「N節ッテ Adjモノダ」	87	1.7
	「N Adjモノダ」	30	0.6
	「Nモ Adjモノダ」 (「というのも」類、「だって」も含む)	358	6.8
	「Nナンテ Adjモノダ」	30	0.6
	「節ナンテ Adjモノダ」	3	
	「節+Adjモノダ」(無表示形式)	88	1.7
	その他の示し方	48	0.9
文中に現れ ない場合	「Adjモノダ」	1,395	26.6
	「節+モノダ」		
合計		5,245	100.0

6) 次のように前の文脈に主語相当の名詞が現れていて(点線)、主語として特定できる例(471例)は「は」の用例数の中に含まれている。これについては本文で後述する。

・燈明台の下には、石の板があった。(中略)黒い大理石のぶ厚いものだ。(ステュクスの一族)

7) 「とは」「なんて」で示される例については、「NトハナンテAdjモノダ」と「節トハナンテAdjモノダ」に分けて示した。これについては本文で詳述する。

<表4>の用例数をみると、主語を「は」で示す「NハAdjモノダ」タイプが48.6%を占めていて、“主語が文中に現れない場合”の「Adjモノダ」「節+モノダ」タイプが26.6%であり、「形容詞+モノダ」文は大きくこの二つのタイプに偏っている。

まず、「NハAdjモノダ」タイプの例(6)をみると、ここでの「もの」は主語名詞の「蘭」のかわりに用いられたもので、典型的な述語名詞としてふるまっている。

- (6) エランギス・ブラキカルパ、エランギス・コンフューザ、エランギス・トムソニイは、アフリカの蘭のなかでも私が最も好きなものである。(世界蘭紀行)

一方、次の例をみると、主語は文中に現れておらず、前後文脈の何らかの事柄や状況を指して述べていて、<表4>で「Adjモノダ」タイプとしたものである。ここでの「もの」は述語名詞性を失い、典型的なモーダルな意味を表す形式になっている。

- (7) 広田先生は三四郎にいった。「英国は利己利他両主義がうまく平衡している。だから進歩しない。イブセンもニイチェも出ない。気の毒なものだ。自分だけでは得意のようだが傍から見れば堅くなって化石しかかっている。」(和辻哲郎全集)

このように、述語名詞としての「もの」かモーダルな意味を表す「ものだ」かは、主語が文中に存在するか否か、また文中に存在するとしたら主語をどのように示すかとかかわっているようである。つまり、「形容詞+モノダ」文には「もの」が典型的に述語名詞としてふるまう文のタイプと典型的にモーダルな形式と言える文のタイプがあり、その中間にはさらにさまざまな文のタイプが存在すると言えそうである。以下では、<表4>の文のタイプをもとに、「もの」が典型的に述語名詞として機能する文のタイプからモーダルな意味を表す典型的な文のタイプまで詳しく説明する。

4.2 「形容詞+モノダ」文のタイプ

4.2.1 「Nハ Adjモノダ」タイプ(「Nガ Adjモノダ」)

主語を「は」で示す「NハAdjモノダ」タイプは、「もの」が述語名詞として働く場合の典型的なタイプと言える。「もの」は主語名詞の表す事物の上位概念の名詞として用いられ、形容詞とあいまってその特性を述べる。

- (8) 白石(千六百五十七~千七百二十五)が、キリシタンのとりしらべに使ったもので、現在、完全な形でのこっているブラウの「新世界全図」は、世界中でこれ一枚だけという貴重なものです。
(地図で見る世界の形の移りかわり)

なお、前後の文脈に主語相応のものが現れていて、当該の文においては主語が省略されている場合がある。たとえば、次の例では「形容詞+モノダ」文(「…古いものだ」)に主語が省略されているが、前の文脈に現れている「日本橋」がそれに相応すると判断される。つまり、「日本橋は橋の文物のなかでは一番古いものだ」という関係であるため、「NハAdjモノダ」タイプに入れることができる。

- (9) かつて日本人町と中国人町をつないだ橋で、俗名を日本橋という。(中略)土地の歴史家の話では年代は不明だが、橋の文物のなかでは一番古いものだ。(もっと知りたいベトナム)

また、上にも述べたように、「Nハ」ではなく、「Nガ」である「NガAdjモノダ」文もみられるが、そのほとんどは引用節や理由節など従属節で現れるか(例10)、比較構文の中に現れている(例11)。このタイプも「もの」が述語名詞として機能しており、「時間は貴重なものだ」「千三百三十四年に手で書かれたタルムードは現存している最も古いものである」のように言い換えられるため、文のタイプとしてはここに入れられる。<表4>に示したように、「NハAdjモノダ」文は2,548例(48.6%)で、「NガAdjモノダ」文の252例(4.8%)を含めると、2,800例(53.4%)であり、全体の半数以上を占めることになる。

- (10) 目標を意識し、計画を立てることで、時間が貴重なものだとわかってくる。
(がんばる力とたしかな学力)
- (11) タルムードはバビロニアで紀元後五百年に編纂が始まった。千三百三十四年に手で書かれたタルムードが、現存している最も古いものである。
(ユダヤ5000年の知恵)

以上で述べたように、「形容詞+モノダ」文は主語名詞の表す事物の恒常的な特性を述べることを基本としており、主語を示す代表的な形式は「は」である。すなわち、「NハAdjモノダ」タイプは、述語名詞としての「もの」の典型的な形式である。

4.2.2 「N/節トイウノハ Adjモノダ」「Nトハ Adjモノダ」「N/節ッテ Adjモノダ」「N Adjモノダ」タイプ

「N/節トイウノハAdjモノダ」「NトハAdjモノダ」「N/節ッテAdjモノダ」「N Adjモノダ」タイ

プは、主語を「は」ではなく、「というのは」「とは」「って」「無助詞」で示すタイプである。このうち、「というのは」「とは」「って」は本来引用形式とかかわる標識で、「ものだ」のモーダルな意味と何らかのかかわりがありそうである。

まず、実例から「というのは」類で示された主語の性質を調査してみると、主語が一般・総称的なものの場合が301例のうち264例(87.7%)であり、個別・具体的なものより多い。このように「N/節トイウノハAdjモノダ」は、一般・総称的なものを主語として取り上げ、その一般的な特性を述べるのに用いられやすい。さらにこの文のタイプでは、主語名詞の表すモノの一般的な特性を述べるだけでなく、それに対する認識や詠嘆のようなモーダルな意味へ発展していくことが多い。

《「というのは」》

- (12) 「一昨日の夜は、何処にいらっしゃいましたか？」十津川がきいた。「私のアリバイですか。ここのところ忙しくて、ここに泊まり込みです」「それを証明してくれる人がいますか？」と、十津川がきくと、須崎はからかうように、「**社長というのは、孤独なものですよ**」いった。
(西伊豆美しき殺意)

《「というものは」》

- (13) 「なんだ、わたしども夫婦のアリバイ調べですかあ」「いや、どうも失礼しました。じつはご令息もあなたのように、素直に答えてくださるとよろしいんですが、それがなかなか...」「いや、**あの年頃の男の子というものは、取り扱いがむづかしいものです**。とくに受験に失敗してからは、ちょっとした被害妄想狂みたいになってるんじゃないですか。(後略)」
(病院坂の首縊りの家)

なお、次のように出来事や事柄を取り上げ、その特性を述べる場合も同じである。単に特性を述べるだけではなく、それを認識し感心する気持ちや詠嘆の意味合いも感じられる。

《「というのは」》

- (14) **水が飲めないというのは、苦しいものだ**。あれほどつらいとは思ってもみなかった。
(弟を地に埋めて)

《「ということは」》

- (15) **歯切れがよいということは、長い間聞いていても気持がよいものです**。声に響きが出ますから、生き生きとしてつい耳を傾けてしまいます。
(「ことば上手」は仕事上手)

「NトハAdjモノダ」も主語名詞の表す事物について定義したり、特性を述べたりする場合に用いられる形式である。たとえば、次のように一般・総称的なものを主語として取り上げ、その特性を述べるが、文全体に詠嘆のようなモーダルな意味を帯びることが多い。

- (16) いかにも味方をあざむくためとはいえ、いたずらにしたって、あの楚々たる千姫さまが、よくも、まあ、女とは恐ろしいものだ。天性のうそつきの化けものだ、と平太郎は痛嘆した。
(魔天忍法帖)

「N/節ッテAdj +モノダ」も「N/節トイウノハAdjモノダ」「NトハAdjモノダ」と同じように主語名詞の表す事物の特性を述べる形式であるが、主語表示「って」は「Nがどういうものであるか改めて捉え直すという場合に用いられる(丹羽2006: 273)」ことが多い標識で、捉えなおした主語に対してそれがどういうものかを再認識するという意味合いが感じられる。

- (17) 「ただ何となく、一人じゃ寂しくて」(中略)「人間って、はかないものね」「ああ、そうだな」
(一千年の陰謀)

無助詞形式の「N Adjモノダ」は「形容詞+モノダ」文にとりわけ多くみられるわけではないが(0.6%)、次のように一般・総称的なもの(「世の中」「人間」)を主語として取り上げ、それに対する認識や詠嘆のようなモーダルな意味が表現されることがある。

- (18) まあよくできた噺で、今でも名人上手といわれる噺家さんが時々演りますが…。こういう出来過ぎた話は現実にはないだろう…と思ってたら、あったあった、世の中実に面白いもんだ。
(脳のことなど話してみよう)
- (19) 人間だから、上手くいかなかった時だってある筈だ。それでも、何とかやって来たのは、トクになることしかやらない。それに徹底してきたことだ。人間弱いもんだ。義理人情で、動いてしまうことがある。
(熱海・湯河原殺人事件)

この節で述べた、「N/節トイウノハAdjモノダ」「NトハAdjモノダ」「N/節ッテAdjモノダ」「N Adjモノダ」タイプでは、主語の示し方(「というのは」「とは」「って」)のもつ引用して捉えなおすという性質、無助詞の現場的な性格と形容詞の評価的な側面があいまって、評価・認識や詠嘆の意味を帯びやすいと言えそうである。

4.2.3 「Nモ Adjモノダ」「Nナンテ Adjモノダ」タイプ

「NモAdjモノダ」と「NナンテAdjモノダ」タイプは、主語が「も」「なんて」で示される場合である。「も」と「なんて」は上に述べた形式のように主語を提示する際に用いられる標識であるが、ほかの形式と違って、それ自体に何らかのモーダルな意味を含んでいるものである。

まず、「も」の意味用法についてみると、寺村(1991)は、寺村(1991:73)で「モP」の基本的な意味は、XについてPを、Pと結びつくものとしてX以外のもの(~X)があるという影と対比しながらいうことである(森さんの奥さんも小児科医です。p.73)と述べたうえで、寺村(1991:91)において「モP」には「単なる基本的な意味、つまり「以外のものについて同様にP」という影との対比において生ずる意味でなく、特別の表現効果を生じるもう一つの場合がある」とする。そして、それは「「がPすることなどありえない、その」がPするほど.....」というような、意外さを背景とする強調効果でもなく、昔から使われてきた「詠嘆」という言葉以外には適当な言い表わしかたがないような情緒的な効果である。(p.91)と述べている。「形容詞+モノダ」文は、このような詠嘆を表す「も」とよく結びつく傾向がみられる。

(20) このジャスミンティーは改めて中国茶の良さを再確認させてくれた。取り皿まで、わざわざ温かく温めてくれている、心遣いがうれしい。たまには静かなレストランでの食事もいいものだ。
(Yahoo!ブログ)

(21) 日本人が昔から培ってきた自然との調和の精神を感じさせてくれます。家族みんなで森にでかけ、新鮮な空気の中、お弁当を広げるのもなかなか楽しいものです。美味しいお弁当がさらに美味しく感じられることでしょう。
(森からの伝言)

特に「...もいいものだ」の形で用いられることが多く(例20)、「も」で示された328例のうち、81例(24.7%)を占めている。その他、感情形容詞や評価性の強い形容詞(「楽しい」「素晴らしい」など)が多くみられ、文全体が詠嘆の意味を帯びやすい。また、次の例のように主語名詞が抽象名詞や現象名詞で、その程度のはなはだしさに焦点が置かれている場合には、感心や詠嘆の意味がより感じられやすいと思われる。

(22) 翌日、蓮香が来て、李がまたやって来たことを知ると、「あなたはどうあっても死にたいんですか」と怒った。桑が、「君の焼き餅も相当なものだなあ」と笑うと、蓮香はますます怒った。
(聊齋志異)

次は「なんて」で提示する例であるが、「なんて」には「話し手の評価を暗示する用法(山田1995:339-340)」があり、主語を「なんて」で提示することによって、主語に対する評価・認識的な意味が感じられる。

- (23) 「もうしばらく、ここで養生させてください」「いやあよ姉はかぶりを振った。「あんたたちがここにいたら、わたしまで捕まっちゃうわ」こうなると女なんて薄情なものである。我が身可愛さに、負傷者をぜんぶ家の外へ叩き出してしまった。(アルファルファ作戦)

4.2.4 「節+Adjモノダ」「節トハ Adjモノダ」「節ナンテ Adjモノダ」タイプ

「節+Adjモノダ」「節トハAdjモノダ」「節ナンテAdjモノダ」タイプには、次のような下位のタイプがある。

ーと/たら/ば/なら、 ーが/ーけど、 ーから、 ーて、	}	+ 形容詞+モノダ
ートハ、 ーナンテ、	}	+ 形容詞+モノダ

句や節を提示する形式(条件節(「ーと」など)、ーガ節(「ーが/けど」)、理由節(「ーから」)、ーテ節など)は本稿では「無表示」形式として扱っている。「無表示」形式は従属節をもって特性の持ち主を提示している例であるが、このような場合は「と」「たら」「けど」などによる節で提示することで、その特性の持ち主が何かということが把握できるため、特に主語が必要ではないものである。この形式は特に形容詞述語文(「ものだ」のついていない形容詞述語)によくみられる形式であるが⁸⁾、文末が「ーものだ」になると、従属節で述べられた事柄に対して、形容詞の表す評価的な側面だけでなく、それを認識する話し手の態度が表現される。

◀「条件節」▶

- (24) このmakePathのような関数を作っていると、まるでパズルを解いているようで楽しいもの

8) 形容詞述語文の主語表示については黄(2016)を参照されたい。

です。

(ゼロからはじめるVisual Basic)

《「～ガ節」》

- (25) 十数人のグループの頭株が「井出」と名乗る人物で部屋には軽機と小銃が銃架に掛けてあった。国民党軍の大尉だと自称していたが怪しいものだ。自分が口を利けば将校待遇であな
たを迎えると誘われたが話がうま過ぎる。 (南洋学院)

《「理由節」》

- (26) 「人間は生きていかなければならない。そのためにはどんなことをしたって大抵のことは
許されると俺は思っている。だから、豊の体も心も汚れてなんぞはいない」(中略)「第一、
豊は誰にも迷惑なんかかけてないじゃないか。自分の力だけでちゃんと生きてるんだから
立派なものだ」 (殴られ屋の女神)

《「動詞+テ形」》

- (27) 用件をお話ししてから、三人の子どもたちの、両親のことをたずねると、お父さんもお母
さんも、とてもよい職に就いていて、立派なものだとさんざん自慢話をされました。
(ADHDの恭平くん)

また、条件節、～ガ節、理由節、～テ節のほかにも、「～とは」「～なんて」によって句や節を提示する場合にも同じような特徴がみられる。「形容詞+モノダ」文では、「とは」で示された105例のうち、名詞が100例(95.2%)、句や節が5例(4.8%)で、「なんて」で示された33例のうち、30例が名詞(89.7%)、3例(10.3%)が句や節であり、このうち名詞に接続している例については前節で述べた。「～とは」「～なんて」で句や節を取り上げる例をみると、用例数は少ないが、上の無表示形式のように、提示された出来事や事柄の内容に対する詠嘆や認識態度が感じられる。

《「～とは」》

- (28) また、少し動くだけでも痛い。手術後の痛み止めのための処置なのに、現在、痛みの原因
になっているとは皮肉なものだ。 (ガンを生きる)

《「～なんて」》

- (29) 菅平のペンションに泊まって、気持ちの良い秋の一日を歩き通しました。四阿山の山頂では、その土地のグループがにぎやかに宴会の最中。山頂で浮かれられるなんて、ぜいたく
なものです。 (明日のおもいで)

『日本国語大辞典』第二版の「とは」と「なんて」についての定義をみても、第九巻では「とは」について、一つ目には「説明・思考・知覚などの対象やその内容を取り立てていうのに

用いる(p.1299)」とし、二つ目には「意外・不満・感謝などの感情を引き起こした事柄を取り立てていうのに用いる(p.1299)」と記述している。また、第十巻では「なんて」について、副助詞「など」に格助詞「と」のついた「などと」の変化したものとし、「問題になっている事物・事態が基準を逸脱しているという評価を表し、また、引用を修辭的にぼやかすのに用いられる。(p.341)」と述べている。このように、「とは」「なんて」には話し手の評価を暗示する性質があり、それとあいまってモーダルな意味が表されやすい。

以上で述べたように、「節+Adjモノダ」「節トハAdjモノダ」「節ナンテAdjモノダ」では、特性の持ち主が句や節の形で提示され、それに対する話し手の認識態度が表現されている。「ものだ」はこのように事柄の内容が名詞ではなく句や節の形で提示される環境において、よりモーダルな意味に解釈されやすいと言えそうである。

4.2.5 「Adjモノダ」タイプ

「Adjモノダ」タイプと次節で述べる「節+モノダ」タイプは、4.2.1節～4.2.4節に挙げた文とは違って特性の持ち主が文中に現れていないタイプである。この二つのタイプでは主語と「形容詞+もの」の間の主述関係が不明確であり、ここでの「ものだ」は典型的なモーダルな意味を表す形式になっている。また、<表4>の用例数をみると、1,395例で全体の26.6%を占めていて、「NハAdjモノダ」タイプの次に多くみられる。

まず、「Adjモノダ」タイプをみると、このタイプは主語が文中に明示されず、「Adjモノダ」の形で述べる文である。この場合、先行する文脈に述べられている何らかの事柄や外的状況を指して述べる場合が多く、その事柄の内容に対する詠嘆の意味が表現されている。たとえば、次の例では先述のある空間の風景(「啄かれた黒い土から春の陽炎だけがゆらゆらと立ち昇っている」という風景)に対して、「のどかなものだ」と感心する気持ちを述べている。

- (30) 覗いて見ても別に何も珍しいものもない。啄かれた黒い土から、ゆらゆらと立ち昇っているのは、春の陽炎だけである。「一のどかなものだナ」と思わず呟いて、ぼんやりと眺めていると、「おい、おい、長閑なのは君だぜ、そら一ここへびしゃりと、王手!」と、(後略)
(達磨峠の事件)

次の例では「今は歩いてものぞいても時計がない」という現在の外的状況に対する話し手の評価・認識によって、文全体が詠嘆の意味を帯びている。

- (31) 「通り」から「時計」が見えなくなって、久しい。「今何時だろう?」と思ってから、2~3歩も歩けば、通りからのぞき見ることができる位置に「時計」が掛けてあるのが「店」のジョーシキ、街のジョーシキであった。それが今は、歩いても歩いても、のぞいてもものぞいても、時計は、なし。味気ないモンである。 (思春期・生きて在る日日)

このようなタイプでは、事柄の内容だけでなく、人の様子や態度が詠嘆の対象になる場合もある。次の例では、「志木子ちゃんがよく頑張ってひとりでここまで匠くんを育てて来たこと」に対して、「立派なものだ」と評価しており、話し手の詠嘆が感じられる。

- (32) 「いや、ほんとに、大変だったんだね。その若さで五歳の子供だから、それなりの事情はあると思っていただけけど、うん、ちょっとびっくりした。でも、ほんとえらいよ、志木子ちゃん、よく頑張ってひとりでここまで匠くんを育てて来たね。いや、まったくりっぱなものだよ」 (小説新潮)

以上で述べたように、「Adjモノダ」タイプでは前後の文脈に現れている事柄の内容に対して、その場での評価や感心する気持ちを述べることが多く、「もの」は述語名詞性を失い、モーダルな意味を表す形式へ移行している。本来モーダルな意味というのは、事柄に対する話し手の認識態度を示すものであり、それがこの構文的な形として反映されていると言えそうである。

4.2.6 「節+モノダ」タイプ

「節+モノダ」タイプは、前節で述べたように主述関係が不明な文である。本来述語名詞としての「もの」は主語名詞の表す事物の上位概念の名詞として用いられるものであるが、それに当たる主語名詞を特定できない場合である。つまり、このような文の中では主語と「形容詞+もの」の間の特性の持ち主と特性という関係が崩れ、事柄の内容を表す節全体に「ものだ」が接続している形になっているのである。このような文において「もの」は、前節で述べた「Adjモノダ」タイプと同様に述語名詞性を失い、モーダルな形式へ移行していると言えそうである。このタイプに属するのは、たとえば次のような文である。次の例では、「落ち込みがはげしいもの」「多いもの」に当たる主語名詞が見つからず、「できる人ほど失敗すると落ち込みがはげしい」「目標が遠くにあると案外うまくいかなることが多い」という事柄全体に「ものだ」が接続している形になっている。

- (33) 「できる人」ほど、失敗すると、落ち込みがはげしいものです。仕事や人間関係をバツグンのセンスでこなすのだけれど、一度落ち込むとなかなか立ち直れない人ですね。
(営業のトッププロが教える「その一言」で相手の気持ちを動かす技術)
- (34) ゴールから逆算して日にちやスケジュールを調整していたとしても、目標が遠くにあると、案外うまくいかなくなることが多いものだ。そういうときは、手をつけはじめる前に、仕事をできるだけ細切れにしてみるといい。(仕事ができる人のちょっとしたコツ400)

以上のように、主述関係が崩れ、「もの」に当たる主語名詞を特定できない場合には「もの」は述語名詞としての機能を失い、モーダルな意味を表す形式へ移行する。

5. おわりに

以上、本稿では「形容詞+モノダ」文の文中での特性の持ち主の示し方を調査し、「ものだ」のモーダルな意味とのかかわりを具体的な構文的な形として示した。

「モノダ」文には「もの」が述語名詞として機能する典型的な文のタイプ(「N+Adjモノダ」タイプ)とモーダルな意味を表す形式と言える典型的な文のタイプ(「Adjモノダ」タイプ、「節+モノダ」タイプ)があり、その間にはさまざまなタイプが存在する。中間領域にはより述語名詞的な「もの」とよりモーダルな形式的な「もの」が混在しており、述語名詞としての「もの」なのか、モーダルな意味を表す形式なのか、二つの境界線をひくのが難しい場合もある。

全体として、述語名詞としての「もの」の場合には特性の持ち主が名詞(「こと」や「の」で名詞化されたものも含む)で示される傾向があるのに対して、典型的なモーダルな形式に近くなると、特性の持ち主が名詞ではなく句や節で示されることが多く、句や節で述べられる事柄の内容に対する認識態度や詠嘆が感じられる。文中で特性の持ち主をどのような形で取り上げるか(名詞か句や節かなど)、その示し方はどのような性質をもつのかなどさまざまな要因がかかわって、「もの」はモーダルな形式へ移行すると思われる。

以上のように、「モノダ」文は「もの」が述語名詞として機能する場合とモーダルな意味を表す場合とが連続的な関係にあり、それには構文構造の変化を伴う。本稿では「モノダ」文の構文要素のうち、主語の示し方に注目したが、他の要素との関連性や「モノダ」文全般に適用できるかどうかについてもさらなる考察が求められる。また、本稿での考察結果をも

とに、日本語教育における有効性や他の形式名詞文との比較などについても今後検討していきたい。

【参考文献】

- 揚妻祐樹(1991)「実質名詞「もの」と形式的用法との意味的なつながり」『東北大学文学部日本語学科論集』1、東北大学、pp.1-12
- _____ (1992)「体言的素材性カテゴリーとしての「もの」」『東北大学文学部日本語学科論集』2、東北大学、pp.1-11
- 田辺和子(1998)「形式名詞「モノ」における文法化としての文脈化と主観化」『日本女子大学紀要文学部』47、日本女子大学、pp.51-65
- 坪根由香里(1994)「「もの」に関する一考察」『日本語教育』84、日本語教育学会、pp.65-77
- 寺村秀夫(1980)「ムードの形式と意味(2)―事態説明の表現―」『文藝言語研究 言語篇』5、筑波大学文芸・言語学系、pp.103-119
- _____ (1981)「「モノ」と「こと」」『馬淵和夫博士退官記念国語学論集』大修館書店、pp.743-763
- _____ (1991)『日本語のシンタクスと意味』くろしお出版、pp.69-92
- 日本語記述文法研究会(編)(2003)『現代日本語文法4 第8部モダリティ』くろしお出版、pp.192-194、pp.218-225
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部(編)(2000-2002)『日本国語大辞典』第二版、小学館 [初版:日本大辞典刊行会(編)(1972-1976)]
- 丹羽哲也(2006)『日本語の題目文』和泉書院、p.273
- 黄允實(2016)「山田先生は優しい人だ」構文に関する一考察―「山田先生は優しい」構文と比較しながら」『日本研究教育年報』20、東京外国語大学日本専攻、pp.1-18
- _____ (2017)「形容詞+名詞」述語文と形容詞述語文―主語名詞の表わす事物の「特性」の恒常性と一時性―」『日本研究教育年報』21、東京外国語大学日本専攻、pp.1-18
- _____ (2019)「特性を表す「形容詞+名詞」述語文と形容詞述語文-会話文と地の文における主語の示し方と述語構造とのかわり-」『日本語文学』84、日本語文学会、pp.271-292
- 藤田保幸(2002)「6「へトハ」構文について」『国語引用構文の研究』和泉書院、pp.459-484
- 山田敏弘(1995)「ナドとナンカとナンテー話し手の評価を表すとりたて助詞-」宮島達夫・仁田義雄(編)『日本語類義表現の文法(上)単文編』くろしお出版、pp.335-344

논문투고일 : 2020년 12월 29일
심사개시일 : 2021년 01월 17일
1차 수정일 : 2021년 02월 04일
2차 수정일 : 2021년 02월 14일
게재확정일 : 2021년 02월 17일

〈要旨〉

「モノダ」文の意味と構文構造

- 「形容詞+モノダ」文を中心に -

黄允實

本稿では述語名詞とモーダルな形式との連続性に注目して、「形容詞+モノダ」文の文中での特性の持ち主の示し方を調査し、「ものだ」のモーダルな意味とのかかわりを具体的な構文的な形として示した。

「形容詞+モノダ」文には「もの」が述語名詞として機能する典型的な文のタイプ(「N+Adjモノダ」タイプ)とモーダルな意味を表す形式と言える典型的な文のタイプ(「Adjモノダ」タイプ、「節+モノダ」タイプ)があり、その間にはさまざまなタイプが存在する。中間領域にはより述語名詞的な「もの」とよりモーダルな形式的な「もの」が混在しており、述語名詞としての「もの」なのか、モーダルな意味を表す形式なのか、二つの境界線をひくのが難しい場合もある。全体として、述語名詞としての「もの」の場合には特性の持ち主が名詞(「こと」や「の」で名詞化されたものも含む)で示される傾向があるのに対して、典型的なモーダルな形式に近くなると、特性の持ち主が名詞ではなく句や節で示されることが多く、句や節で述べられる事柄の内容に対する認識態度や詠嘆が感じられる。本来モーダルな意味というのは事柄に対する話し手の態度を示すものであり、それが文の形式の中に反映されていると言えそうである。

The Meanings and Construction forms of *Monoda* sentence

- Focusing on “adjective+monoda” -

Hwang, Youn-Sil

This study considers “Adjective + monoda” sentences from the point of view of the transition from predicate nouns to modal forms. Focusing on how the possessor of a characteristic (subject) is expressed, I show the shift of *mono* from typical predicate nouns to forms expressing modal meanings as a construction form.

From the perspective of sentence constructions, one type of *monoda* sentences behave as typical predicate nouns (“N wa Adj mono da”) and another type can be said to typically express modal meaning (“Adj monoda” “clause + monoda”) with a variety of other intermediate sentence types. The closer intermediate types come to typical modal forms, the more frequently they express the possessor of a characteristic with a phrase or clause rather than a noun. Modal meaning essentially shows the attitude of the speaker towards an event, and this can be said to be reflected in the sentence form.